

れました。

現在残っている収容所入口の門扉には《Jedem das Seine (分相応に)》と記されています。囚人たちに、自分たちの分をわきまえよ、と告げているのでしょうか。入口の上にある時計は今でもここが解放された時刻を指しています。門を通り抜けると右手に火葬場の建物があります。大量虐殺の舞台のひとつです。中には死体置場やナチスの親衛隊(SS)が囚人を棍棒などで虐殺した部屋、焼却炉、死体を解剖した部屋などがあります。ここには医師も常駐し、死体の解剖やさらには生体実験までしたと言われています。ドイツ医学の一断面を見る思いがします。因みにここに勤務していた医師の多くは戦後絞首刑に処せられています。この火葬場ではその他にも、1944年8月14日ここに収容されていたドイツ共産党の指導者エルンスト・テールマンが親衛隊の手によって虐殺されています。

火葬場からさらに丘を下ってゆくと資料館があります。ここにはこの強制収容所で実際にどのようなことが行われたか、を如

実にしめすさまざまな展示品・資料が置かれています。ここに置かれている展示品を見て強く印象に残ったことがひとつあります。私はこれまでに勉強のせいもあって、ナチスによる強制収容所についてはユダヤ人などに対する虐待、ガス室に象徴される大量虐殺などの非人道的な側面にのみ目を向ける傾向がありましたが、ナチスドイツが占領地域一帯に数多く建設した強制収容所での囚人たちの強制労働によってヒトラー政権やそれを支援する資本家たちがいかに多くの利益を得ていたか、をここで知って、目を見張る思いでした。

ワイマールの町に戻って、再び街角に溢れる古典主義文学ゆかりの数々にふれるとゲーテやシラーに代表されるHumanismusと丘の上の強制収容所に見られるファシズムの特徴との間にあるギャップを考えずにはいられません。ドイツ文学やドイツ語教育に携わる者にとって古典主義文学とドイツ・ファシズムとはどうしても避けておれないものでもあるからです。

(1981. 11. 29)

失なわれた神

田 中 健 二

中世、わが国の各地方には大小さまざまな神社が存在していた。それらの地方神社の多くは、その容貌を変えながらも現存しているが、なかには中世的な支配体制の解体と共に存立の基盤を失ない廃れてしまったものも見受けられる。ここで取り上げる宿神・守公神も、中世の終焉と共に失なわ

れた神々の一つである。

宿神・守公神の信仰は早く廃れたために、現在ではその主神すら明らかではない。『日本国語大辞典』を繰れば、宿神(シクシン)が掲げられており、やどっている神、あるいはまつてある神との語義による説明がなされている。守公神(シクウ

シン)は、この宿神と由緒を同じくするものとみられる。この神については柳田国男氏が早く明治43年(1910)初版刊行の『石神問答』(『定本柳田国男集』所収)において考察を加えている。柳田氏は、守公神を諸国に散見する守宮神・司空神・主宮神・四空神などと称する神と同じものとみて、これらはすべて宛字であって、もとはソコ(塞)の神、すなわち辺境の神という意味であると結論している。これらをソコの神とみることの当否はさておいても、その語源を一にするものであることは容易に推察できる。

筆者がこれまで研究のフィールドとしてきた南九州においても、宿神・守公神についての記載が中世の史料にしばしば見えている。まず、日向国では摂関家領の大庄園である島津庄の庄庁に伊勢神宮や春日社などと共に守公神社が奉祀されていたことが知られる。同様に、薩摩国では島津庄に属する伊作庄の庄庁に宿神社が奉祀されていた。大隅国では国府跡比定地に守君(公)神社が現存しており、戦国時代には国府の御神と称されていたことが判明している。また、同国一宮の正八幡宮(現鹿児島神宮)では公文所に守公神が祀られていた。

以上に示した例が、現在のところ中世の南九州において知られる宿神・守公神のすべてである。この四例に共通していることは、いずれも庄庁・国府・公文所などの庄園・公領・神領の行政機関に奉祀されている点である。この点に宿神・守公神に固有の性格を見出すことができる。つまり、宿神・守公神とは行政機関の守護神であり、いわば鎮守の神であって領内における政治の安穩を祈る神であったとみられる。その呼称は、以上に述べたような、行政機関に宿る神、あるいは公(おほやけ)を守る神という神としての特長に由来するものであろう。詮ずるところ、宿神・守公神とは、中世的な支配体制下における領域支配のための政治的守護神であり、かつ政治的組織そのものを守護(鎮守)するところの神であった。

全国的な規模で庄園の倒壊や国府の衰滅が進んだ中世末期において、そこに奉祀されていた宿神・守公神の信仰が急速に失なわれていったことは想像するに難くない。「神は人の敬により威を増し、人は神の徳により運を添う」との中世の願文にみえる文言は、まさに当時の人と神との関りを表しているように。

無心の笑み

藤 瀬 敬

先日、バスの中でのことである。所在なさに本を読んでいた私がふと顔をあげると、目の前に6、7か月くらいの色白のかわいらしい幼児が、じっとこちらを見つめ

ていた。あるいはその視線に私は顔をあげたのかも知れない。つい先ほどまではその席には老婦人が坐っていたのだが、さっきの停留場で若い母親とこの幼な児に代った